

かいじん二十めんそう

江戸川乱歩

青空文庫

1

ある日、しょうねんたんていだんのぽけつと小こぞうは、ひとりで、さびしいのはらがあるいていました。

ぽけつと小ぞうは、小がっこう四ねんせいですが、ようちえんのせいとみたいにからだが小ちいさくて、ぽけつとにでもはいりそうだというので、こんなあだながついているのです。

のはらには、はやしがあつて、そのむこうに、りっぱなようかんがたつていました。

大きな三がいだてのいえです。

ほけつと小ぞうは、そのようかんが、あまりへんなかつこうを
しているの、そばまでいってみました。このへんにはいえがな
く、このようかんだけが、ぽつんとたっているのです。

その、れんがのへいのをあるいていると、どこからか、
「きやあ」というさけびごえがきこえてきました。

びつくりして、あたりをみまわすと、ようかんの三がいのまど
が、一つだけあいています。

^{とお}十ぐらいの女の子が、そこからからだをのりだすようにして、
たすけをもとめていました。ほけつと小ぞうは、すぐ、ほけつと
から小がたのぼうえんきようをとりだして、目にあてました。

この小さいぼうえんきようは、しょうねんたんでいだんの七つ

どうぐの一つで、いつでももちあるいているのです。ぼうえんき
ようの中に、女の子のかおが、大きくうつりました。そのかおが、
とてもこわそうに、目をいっぱいにひらいて、たすけをもとめて
いるのです。

そのとき、ぼうえんきようの中の女の子のうしろに、大きな、
きみのわるいものが、ぼんやりとうつりました。

あつ、らいおんです。たてがみのある、大きならいおんが、い
まにも、女の子にとびつきそうにしているのです。

「きやあ」

また、ひめいがきこえました。

ぽけつと小ぞうは、いきなりかけだしました。そして、ちかく

のこうばんをさがして、そのことをしらせたのです。

おまわりさんは、びつくりして、ふたりづれで、そのようかんにかけつけました。

げんかんのべるをおすと、中から、白いあごひげのあるおじいさんがでてきました。

「わたしは、このいえのしゅじんだが、うちには、そんな女の子はいない。まして、らいおんなど、いるはずがない。その子どもは、ゆめでもみたんだらう。ははははは」
とわらいとばすのでした。

おまわりさんは、しかたがないので、そのままひきあげてしまいました。

けれど、ぼけつと小ぞうは、どうしてもあきらめることができません。よるになるまで、ようかんのまわりをあちこちあるきながら、もう一ど女の子のかおがみえないかと、まちかまえていました。でも、あのまどは、もうしまっていて、しいんとしていません。

よるになると、ぼけつと小ぞうは、もんの中へしのびこみました。

ぼけつと小ぞうは、こっそりと、ようかんのよこへまわっていきました。

すると、一かいの一つのまどに、あかりがついています。のぞいてみると、そこに、さっきの女の子がいるではありませんか。

女の子は、くろいきれで目かくしをされ、さるぐつわをはめられています。そのそばに、くろめがねのわかいおとこが、こわいかおをして、たっていました。

そのとき、もんのそとに、じどうしゃのとまるおとがしました。ぽけつと小ぞうは、

「あつ、きつとそうだ」
とうなずきました。

足おとのしないようにかけだして、もんのそとへでてみると、大がたのじどうしゃがとまっています。

じどうしゃのうしろの、にもつをいれるとらんくのふたがうまくひらきました。ぽけつと小ぞうは、いきなり、その中へもぐり

こんで、もとのとおりにふたをしめました。

まもなく、くろめがねのおとこが、女の子をつれて、じどうしやにのると、そのまま、どこかへはしりだしました。

あの女の子は、いったいだれなのでしょう。ひるまみたのは、ほんとうのらいおんだったのでしょうか。そして、とらんくにかくれたぽけつと小ぞうは、これからなにをするのでしょうか。

2

あるばんのことです。くろいめがねをかけたおとこが、かわいらしい女の子をじどうしやにのせて、どこかへつれていくのです。

しようねんたんていだんのぽけつと小ぞうは、じどうしやのうしろのとらんくの中にかくれました。

じどうしやは、さびしいはらっぱでとまりました。

くろめがねは、女の子の手をひいて、くるまからおりました。あたりはまつくらです。大きな木の下に、ひとりのおとこがはこをもつてたつていました。

「やくそくのほうせきは、もつてきたか」

くろめがねがきくと、おとこがうなずきました。くろめがねは、つれていた女の子と、おとこのもつていたはこをとりかえつこしました。ぽけつと小ぞうは、とらんくのふたをすこしひらいて、みていました。

「ははあ、わかったぞ。ほうせきばこと、女の子をとりかえたんだな。よしつ、ぼくは、きつと、ほうせきばこをとりかえしてやるぞっ」

くろめがねは、ほうせきばこをもって、じどうしやにのりしました。

そして、もとのあやしいようかんにかえりました。

とらんくの中にかくれていたぼけつと小ぞうも、そこからでて、ようかんの中へしのびこみました。

うすぐらいろうかを、足おとをしのばせてあるいていきました。つきあたりのどあがひらいていたので、そのへやへはいつていききました。

へやの中は、まっくらです。かいだんのようなものが、あったので、二だんのぼりました。そのとき、うしろで、がちやんというおとがしました。

おどろいてうしろに手をのばしてみると、そこには、てつこのうしがしまっていたではありませんか。

ぱつと、へやのでんとうがつかしました。

「あつ、たいへんだつ」

ほけつと小ぞうはさげびました。それは、大きなもうじゅうのおりで、ほけつと小ぞうは、その中へとじこめられていたのです。さつき、がちやんといったのは、おりのとがしまつたおとでした。むこうのすみに、一ぴきのらいおんがねそべっていました。

らいおんは、ぽけつと小ぞうがはいってきたのを見ると、ぐうつとくびを上げて、こわい目でにらみつけました。

ああ、ぽけつと小ぞうは、らいおんにくわれてしまうのでしょうか。

3

ぽけつとこぞうは、わるもののために、どうぶつえんのおりのようなへやにいれられてしまいました。そのへやには、一ぴきのらいおんがいて、ぽけつとこぞうのほうへ、のっしのっしとちかづいてきました。こわいめ、とがったきば。

「ぐあつ」らいおんは、ぽけつとこぞうを、あたまのうえから一のみにしようと思いました。

「ううん」ぽけつとこぞうは、ぱったりたおれてしまいました。すると、へんなことがおこったのです。

らいおんがまえあしで、じぶんのあたまをぐつともちあげたではありませんか。

らいおんのくびがぬけてしまったのです。そのしたから、にんげんのかおがでてきました。にんげんが、らいおんのかわをきて、ばけていたのです。

それは、くろいしやつとずぼんをつけたわかいおとこでした。

「こいつ、きをうしなつてしまった。おい、ぽけつとこぞう、し

っかりしろ。もう、らいおんはいないぞ」

からだをゆすぶられて、ぽけつとこぞうは、めをひらき、きよろきよると、あたりをみまわしました。

「あつ、おじさんが、らいおんのかわをきていたんだな」

「そうだよ。おれは、どんなにんげんにでも、どんなどうぶつにでもばけることのできるせかい一のめいじんだよ」

「それじゃ、おじさんは、かいじん二十めんそうだな」

「うふふふ……、そのとおりだ。ぽけつとこぞう、よくきがついたな」

「で、ぼくをどうしようというの」

「きみのほかに、こばやしくんも、ここへとじこめるのだ。さつ

き、きみのぽけつとから、しょうねんたんていだんのぼつじをだして、みちにまいておいたから、いまに、こばやしくんが、きみをたすけにやってくるからな」

4

「おまえは、ここにはいつていろ」

二十めんそうは、ぽけつとこぞうを二かいのへやおしこめてしまいました。

でも、ぽけつとこぞうはへいきです。へやのすみにあつたべつどにもぐりこみました。

しばらくすると、ぽけつとこぞうは、むつくりおきあがりしました。まどからでて、となりのまどのしたへいき、なかへはいつていきました。

「いまに、あのほうせきをとりかえしてやるぞ」

二十めんそうは、ほうせきのおいてあるへやで、おとがしたの
で、そつととをあけてみました。

「あつ、ほうせきがない。おかしいぞ。ぽけつとこぞうは、へや
をでられぬはずだが……」

二十めんそうは、いそいでいつてみました。ぽけつとこぞうは、
ちやんとべつどにねていました。

「おい、こぞう」

二十めんそうは、ぽけつとこぞうをゆりおこしました。

すると、もうふのなかのぽけつとこぞうのからだだが、ぺこんとへこんでしまったのです。

そして、ぽけつとこぞうのくびだけが、ふわふわとうきあがり
ました。

「あつ、このくびはふうせんだ」

ぽけつとこぞうは、ごむふうせんをふくらまして、じぶんのか
わりにしておいたのです。

そのふうせんは、にんげんのかおのかたちをしていて、にんげ
んのようないろがぬってあったのです。

しようねんたんでいだんのひとりが、みちにおちているばつじをみつけたので、ぽけつとこぞうが、二十めんそうにつかまっていることがわかりました。

こばやしだんちようは、三にんのだんいんといっしよに、たすけにきました。

すると、もんのところで、ぽけつとこぞうにあいました。こぞうは、二十めんそうのぬすんだほうせきばこをとりかえたのです。

こばやしくんは、すぐに、むせんでんわでけいしちようへしら

せました。

そのしらせで、三だいのぱとろーるかーがかけつけました。

おまわりさんたちは、いえのなかをさがして、三にんのおとこをつかまえました。

「ふしぎだ」

二十めんそうは、どこにもいないのです。いくらさがしてもみつかりません。

しようねんたちがみはっていたのですから、そとへにげだすはずはありません。つかまえたおとこにきくと、

「かしらはまほうつかいだからな。どろんときえちまつたんだよ」とこたえました。

こばやしくんたちは、二十めんそうのへやをさがしました。

「あつ、わかった。二十めんそうは、あそこにいる」

こばやしくんが、だいのうえにすわっているぶつぞうをゆびさしました。

すると、そのぶつぞうは、むくむくとうごいて、いきなりにげだしました。そして、二かいへかけあがっていきます。

「にがすなっ」

みんながおいかけました。二十めんそうはつかまるでしょうか。

二十めんそうは、金いろのぶつぞうにばけて、二かいのへやへにげだしました。二かいのやねの上は、たいらになっていて、小さな小^こやがたっていました。

二十めんそうは、二かいからはしごをのぼして、そのおくじょうの小やへにげこみました。

こばやしくんたちが、おいかけてのぼっていくと、「あつ」たいへんです。おくじょうに、一だいのヘリコプターがあるのです。二十めんそうは、すばやくヘリコプターにのって、もう、プロペラをまわしています。ヘリコプターは、すうつとそらへのぼっていきます。

それをみると、こばやしくんは、むせんでんわで、けいしちよ

うのなかむらけいぶにしらせました。

なかむらけいぶは、すぐに、けいしちようのヘリコプターを、げんばへとばしました。

こばやくんとポケット小ぞうは、それにのせてもらい、二十めんそうをおいかけます。そらの大きようそうです。こちらのヘリコプターはすごいはやさでおっています。

とおくのそらに、てきのヘリコプターが、ぽつんとみえてきました。

それが、だんだん大きくなり、二十ぶんほどのうちに、とうとうおいついてしまいました。

むこうのヘリコプターの中に、二十めんそうがみえています。

こちらのほうがはやいのですから、もう、にがすしんぱいはありません。どこまでも、うしろからついていけばよいのです。

やがて、ふじ山^{さん}が、大きくみえてきました。二十めんそうは、ふじ山のうらのほうへまわっていきます。

それから、たくさんの山の上をとびました。

二十めんそうのヘリコプターは、あぶらがなくなつて、だんだんおそくなり、とうとう、山の中へおりてしまいました。それを見て、こちらにも、ちやくりくしました。さあ、どうなるでしょう。

二十めんそうは、ヘリコプターでにげましたが、山の中でつまつて、とうきようへつれもどされ、けいしちようにいれられてしまいました。ほうせきは、ポケット小ぞうが、とりかえしておいたので、じけんはおわったかのようにみえました。

ところが、それからふつかめに、たんていじむしよのこばやしくんのところへ、へんなでんわがかかってきました。

「おれは二十めんそうだ。わっはは。きみたちのつかまえたのは、おれの手下てしたさ。ヘリコプターにのるまえに、いれかわったのさ。

ぶつぞうのきものを手下にきせて、おれは、おしいれにかくれたのさ。だから、けいしちようにいるのは、おれの手下だよ。わっはは。

これから、なにをやるか、みてるがいい」

こばやしくんは、びつくりしてしまいました。

そのあくる日のまよなか。ぎんぎの大きなほうせきやのまどガラスが、ガチャンとわれました。みせの人が、おどろいていつてみると、ふとい、まっくろな手が、にゆうつとはいつてきて、たくさんのほうせきをつかんでいました。

にんげんの手ではなくて、くろいてつの手です。みせの人たちは、おもてへとびだしてみました。

「あつ」ロボットです。

みせの人たちは、「どろぼう、どろぼう」とさけびながらおいかけました。パトロールのおまわりさんも、いっしょにおいかけ

ました。

人どおりのないぎんざどおりを、ロボットは、すごいやさでにげていきます。「あつ」四つんばいになりました。

どうぶつのように、手と足とでかけていくのです。よこちようにまがったかとおもうと、ぱつとみえなくなっていました。

いくらさがしてもみつきりません。みんながかえってしまおうと、よこちようのマンホールのふたがもち上がり、中からあのロボットがかおをだして、にやつとわらいました。さあ、どうなるでしょう。

それから一ひと月のあいだに、とうきようのほうぼうで、たくさんのほうせきがぬすまれました。みんな、あのロボットがぬすんだのです。ある日のひるまのことです。

ロボットは、とうきようタワーのちかくのいえにしのびこんで、ほうせきをぬすもうとしたところをみつかってしまいました。そして、おまわりさんにおいかけられたのです。ロボットは、とうきようタワーににげて、けんぶつ人にんにまじってしまいました。

ちようどそこへ、こばやしだんちようとポケット小ぞうが、あそびにきていました。

ふときがつくと、けんぶつ人の中を、へんなやつがあるいてい

るのです。

「こばやしさん、あいつ、へんだね。ロボットみたいだよ」

「あつ、そうだ。二十めんそうのロボットだ」

ふたりが、ロボットをおいかけだしたので、けんぶつの人たちも、ぞろぞろとついてきました。

そこへ、おおぜいのおまわりさんたちが上がってきたので、こばやしくんは、ロボットのことをしらせました。

それから、てんぼうだいは大さわぎです。けんぶつ人でいっばいで、なかなかみつかりません。そのうちに、ロボットのすがたが、どこかへきえてしまいました。

そのとき、てんぼうだいのまん中のドアがひらいて、かかりの

人がとびだしてきました。

「たいへんだあ。あやしいやつが、エレベーターで上に上がっていった」

けんぶつ人は、びっくりしてしまいました。てんぼうだいより、ばいもたかいところにある、さぎようだいへにげていったのです。タワーの下のひろばは、二十めんそうがにげこんだというので、くろ山やまの人ばかりです。そのひとたちのあいだから、「わあっ」というこえがわきあがりました。おお、ごらんなさい。ロボットは、さぎようだいをでて、タワーのてっぺんへのぼっていくのです。そこから上には、エレベーターはありません。

せまいてつばしごをよじのぼって、とうとう、タワーのてっぺ

んまでのぼってしまいました。そして、かた手でてつぼうにつかまり、かた手をひらひらうごかして、下のけんぶつ人をばかにしています。

二十めんそののロボットは、あんなところにのぼって、どうしようというのでしよう。

9

おまわりさんからしらせをうけて、けいしちようのヘリコプターがとんできました。そして、とうきようタワーの上をぐるぐるまわっています。

そのとき、すごいことがおこりました。タワーのてっぺんにいた二十めんそうが、手をはなして、そらへとびたつたのです。

二十めんそうは、フランス人じんがはつめいした、そらのとべるきかいをもっています。はこのようなものをせなかにつけると、それについているプロペラがまわるのです。それをどこかにかくしておいて、いま、からだにつけてとびたつたのです。

まるで、にんげんのかたちをしたとりのようです。そんなにはやくはありませんが、ふわふわと、とうきようこうのほうへとんでいきます。

ヘリコプターは、すぐおいつきました。その上ですから、つかまえることができませぬ。ただついていくだけです。

もう、うみにでました。二十めんそうは、だんだん下へおりていきます。その下には、一そうのモーターボートがまちかまえていました。

二十めんそうの手下がうんてんしているのです。二十めんそうは、モーターボートにのってしまいました。

ヘリコプターからのむでんで、水すいじょう 上げいさつのランチが、

ぜんそくりよくでやってきました。おまわりさんが、六人のりこんでいます。さあ、大きようそうです。白しらなみをけたててにげるモーターボート。おいかけるランチ。ランチのほうがはやいので、すぐおいつきました。

モーターボートは、もう、にげるのをあきらめたのか、きかい

をとめてしまいました。ランチは、それによこづけになって、三人のおまわりさんがのりこんでいきました。

そして、二十めんそうと手下のおとこをつかまえました、そのとき、びっくりするようなことがおこりました。

おまわりさんたちは、二十めんそうと手下をたかくもち上げて、くるくるとふりまわしているのです。

それは、ようふくとにんぎょうのかおとぼうしだけで、中みにんげんは、どこかへきえてしまっていたのです。

二十めんそうは、いったい、どこにかくれたのでしょうか。

二十めんそうと手下は、うみの中へとびこんだかもしれないというので、たくさんのランチをだしてさがしました。でも、どうしてもみづかりません。

こちらは、こばやくんとポケット小ぞうです。

「ねえ、こばやしさん。二十めんそうは、ふねに、アクアラングをよういしておいて、それをつけて、とびこんだのかもしれないね」

「うん、きつとそうだ。アクアラングなら、いつまでもうみの中にかくれていられるからね。よしっ、だんいをあつめて、ぼくたちもうみにもぐって、二十めんそうをさがすのだ」

こばやしくんは、しようねんたんていだんいのうち、およぎのうまい三人にでんわをかけてよびあつめました。みずのくん・いのうえくん・木^{きのした}下くんです。

みずのくんのにいさんが、とくべつじかけのアクアラングを二^{ふた}くもっているのです、それをかりてくるようにたのみました。

しばらくすると、こばやしくとポケット小ぞうと三人のだんいは、モーターボートをかりて、とうきょうこうへのりだしていきました。

やがて、二十めんそうのボートのつかまったあたりへきました。すぐそばに、おだいばがみえています。

このおだいばがあやしいのです。

五人は、ボートをおだいばへつけました。こばやしくとみずのくんが、アクアラングをつけて、うみの中にとびこみました。そうして、すこしやすんではまた、とびこんでいきます。

こうして、おだいばのきしを、ぐるっとまわっていくのでした。このへんのうみのそこは、ごみがいっぱいです。どろの中から、いろいろなかいうみがはえていて、ゆらゆらとうごいています。

こばやしくとみずのくんは、うみのそこをおよぎまわりながら、ときどき、そばへよって手をにぎりあいます。

すると、アクアラングにしかけたでんわのせんが、手のひらでつうじあって、はなしができます。

「みずのくん、あそこにあやしいほらあながあるよ。いってみよう」

「うん、いってみよう」

ふたりは、おだいばのきしにちかづき、ほらあなにはいろうとしました。

ふたりは、なにをみたのか、ぎよつとしたように、いわかげにかくれました。まっくらなほらあなのおくに、おそろしく大きなものがうごいていたのです。ふたりが、じつとみつめていると、その大きなものは、ぬうつとでてきました。ながさが六メートルもある、まっくらな、くじらの子どもみたいなものです。

大きい二つの目が、じどうしやのライトのようにひかっ

す。

「あつ、わかった。せんこうていだつ。

二十めんそうは、小さいせんこうていをもっているんだ。

あいつ、この中にかくれていたんだな」

こばやしくんは、こころのなかでさけびました。

そして、いそいで、みずのくんの手をにぎりました。さあ、どうなるでしょう。

こばやしくんは、せんこうていにおよぎついて、そのせなかに

上のほりました。そして、せなかにもり上がっているまるいガラスの中をのぞきました。

すると、中に、にんげんのあたまがみえました。二十めんそうです。ふたりはガラスをへだてて、五十センチぐらいのところでおそろしいかおでにらみあいました。

たしかに二十めんそうだとわかると、こぼやくんとみずのくんは、うき上がってボートに上りつき、みんなで、おだいばに、じょうりくしました。

せんこうていのかくれていたほらあなは、きつと、おだいばの上にいり口があるとおもったからです。

さがしてみると、それらしいあながみつかりました。

ぼうぼうとはえたくさの中に、石をつんでつくったいどのよう
なあながあったのです。

「ポケットくん、はいつてみたまえ」

こばやしくんにいわれて、ポケット小ぞうは、まっくらなあな
へはいつていきました。すこしたつと、はいだしてきて、「たし
かに、下のほらあなにつうじているよ」といいました。

それから、みんなはモーターボートにのって、水上けいさつへ
いそぎました。そして、いまのことをしらせると、おまわりさん
たちは、ランチに大きなコンクリートのかたまりをたくさんつん
で、おだいばへむかいました。

みんなのモーターボートも、そのあとについていきます。

こばやしくんたちだけが、おだいばに上って、せんこうていのかえつてくるのをまっています。

「かえつてきたよ。いま、この下にいるよ」

ポケット小ぞうのしらせに、こばやしくんは、手のしんごうで、そのことを、うみにいるけいさつのランチにしらせました。

すると、ランチは、うみのそのほらあなのそばへすすんで、おまわりさんたちは、コンクリートのかたまりをうみの中へおとしはじめました。

そして、ぜんぶおとししまうと、コンクリートがつみかさなつて、ほらあなをふさぎ、せんこうていは、でられなくなつてしまいました。

さあ、ふくろのねずみです。

おまわりさんたちも、おだいばにじょうりくして、くさの中
すがたをかくし、二十めんそうがあなからでてくるのをまっ
ました。

すこしすると、あなの中から、ぬうつと人のかおがあらわれ
ました。

二十めんそうです。それにつづいて、手下たちもでてきまし
た。おまわりさんところばやしくんたちが、ぱつとたち上が
つてとびかかりました。

二十めんそうは、すばやくみをかわしてにげまわり、なか
ななつかまりません。

そのとき、むこうのくさの中から、むくむくと、ふくれ上がったくるものがありました。さあ、いったい、なんでしょう。

12

こばやしくんやポケット小ぞうやおまわりさんたちは、おだいばのくさむらで二十めんそうをおいかけましたが、うまくにげまわるので、つかまりません。

二十めんそうは、がけつぷちにたつて、わらいだしました。

「あははは。おれはつかまらないぞ。いつも、おれには、おくの手があるからな。」

おい、あれをみる。あそこに、かいぶつとうごいでいるのがみえるか」

二十めんそうにいわれて、そのほうをみると、人よりもたかくのびたくさむらの中に、大きな、はいろいろのたこにゆうどうのよくなものが、むくむくとふくれあがっていました。

あれは、いったいなんだろうと、みんなおどろきました。

そのはいいろのものは、みるみる大きくなって、すうつと、くうちゅうにうき上がりました。それは、五メートルぐらいの大きくなたまです。

たまの下に、なわばしごのようなものが、ぶらりとさがっています。

二十めんそうは、ぱつとかけだして、そのなわばしごとびつきました。

それは、大きなふうせんだったので。

二十めんそうは、こんなときのように、くさむらの中に、ふうせんと、すいそガスのポンプをかくしておいたのです。きつきから、手下が、ふうせんにガスをいれていたのです。大ふうせんは、ふわふわと、そらたかくのぼっていきます。

「どうだ、おくの手がわかったか」

二十めんそうは、みんなをみおろして、からからとわらいました。

ふうせんは、かぜにふかれてりくのほうへとんでいくので、み

んなは、ランチでりくにもどり、れんらくしておいたけいさつの
じどうしやにのつて、おいかけました。

ふうせんは、にしへにしへとながされて、よこはまのまちをと
おりこしました。

よこはまからすこしいった山の上に、コンクリートの大きなか
んのんさまが、にゆうと、くびをだしていました。

ふうせんは、だんだんしぼんで、そのかんのんさまの上におち
ていきます。

みんなは、じどうしやをおりて、その山にのぼりました。

「あつ、あそこにいる」

二十めんそうは、大かんののかたの上によこたわっていまし

た。

きでもうしなつたのか、みうごきもしません。

「よし、こんどこそ、にがさんぞ」

おまわりさんのひとりは、ながいはしごをかりるために、山を
かけおりにいきました。さあ、二十めんそうはつかまるでしょう
か。それとも……。

13

おまわりさんが、まちへおりにいって、でんわをかけました。
しばらくすると、ウーウーというサイレンのおとがして、しよ

うぼうじどうしやが、山へのぼってきました。

ぐんぐんのびたはしごが、大きなかんのんさまのかたにとどきました。ひとりのしょうぼうしが、それをかけのぼっていきました。

二十めんそうは、かんのんさまのかたに、ぐったりとよこたわっています。

しょうぼうしは、二十めんそうをつかまえました。

あつ、どうでしょう。つかまえた二十めんそうを、いきなり、下へなげだしたではありませんか。みんなは、そこへかけよりました。

「あつ、またにんぎょうだ」

二十めんそうは、いつのまにか、にんぎょうといれかわって、じぶんはどこかへにげてしまったのです。

いくらさがしてもみつからないので、おまわりさんもしょうねんたちも、ひきあげました。

だれもいなくなったあとに、こばやくんとポケット小ぞうが、くさの中にかくれて、じつとまっています。

すると、むこうの木のしげみがガサガサとうごいて、ひげだらけの、こじきのようなおとこがあらわれました。

「あいつ、きつと、二十めんそうがへんそうしているんだよ。さあ、あとをつけよう」

ふたりは、おとこのあとをつけました。

山をおりて、まちのほうへあるいていくと、はやしの中に、一けんのおふりいせいようかんがたっていました。

これも、二十めんそうのかくれがかもしれません。

「ぼく、中のようすをさぐるから、きみは、けいさつにしらせてくれ」

いわれて、ポケット小ぞうは、いきなり、まちのほうへかけだしました。

こばやしくんが、へやからへやへとさがしていると、どこからか、へんなこえがきこえてきました。

「こばやしだな。まっていたぞ。おれは、どこにでもかくれがをもっている。ここもそうだ。だが、ようじんしないと……」

そのこえがきえると、ゆかが、ぱつと二つにわれて、四かくなあながひらきました。

こばやしくんは、ドスンとコンクリートのちかしつにおちこみました。ひどくこしをうって、おき上がれません。

そのとき、ドドドドドのものすごいおとがして、コンクリートのかべのまるいあなから、水がたきのようにおちてきました。

水ぜめです。ああ、こばやしくんは、どうなるでしょう。

かべのあなから、水が、おそろしいいきおいでながれこんでき

ます。

はこのようなコンクリートのちかしつですから、水はたまるばかりです。

三十センチ、五十センチ、一メートル。もう、水が、こぼやくんのむねまできました。

かべには、なんの手がかりもないので、よじのぼることもできません。

いっぽう、ポケット小ぞうは、まちのけいさつしよにかけつけていました。

二十めんそうをおいかけてきたおまわりさんたちは、一ひとやすみしていました。

ポケット小ぞうのはなしをきくと、

「それっ」

といって、みんなじどうしやにのり、はやしの中のようなかんへいそぎました。

ちかしつでは、水が、もう、こばやくんのくびまでできました。それから、あごまで、口まで、はなまで……。

いきができないので、およぐほかありません。

「ははははは。きみは、およぎがうまいね。まあ、ゆっくりおよいでいるがいい」

てんじょうで、ひげもじやのかおがのぞいています。

おまわりさんをのせた二だいのじどうしやは、ぜんそくりよく

ではしつていきました。

ポケット小ぞうは、うんてんだいにとって、みちあんないをしていきます。

はやしがみえてきました。

「あつ、あそこです。こばやしさんがしんぱいです。

いそいでください」

「うふふふ。さつきから、ずいぶんおよいだね。いったい、きみは、どのくらいおよげるんだね。つかれないかね」

てんじょうのあなから、ひげもじやの二十めんそうがからかっているのです。

こばやしくんは、すっかりつかれてしまいました。

もう十ぶんもすれば、ちからがなくなっておぼれしぬかもしれ
ません。

「どうだ、こんどこそおもいしらせてやるのだ。ふふふ。くるし
いか、かわいそうに、なきべそをかいてるな」

そのとき、へんなことがおこりました。

いままで、わらっていた二十めんそうが、

「わあっ」

と、ひめいをあげたのです。上では、ボタン、ボタンと、とつ
くみあいが始まったようです。

二十めんそうは、いいきになっていたので、おまわりさんたち

のきたのにきがつかなかったのです。そして、とうとうつかま
てしまいました。

「こばやしさん、二十めんそうはつかまったよ。いまたすけるか
らね」

ポケット小ぞうは、げんきいっぱいさげびました。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第21巻 ふしぎな人」光文社文庫、光
文社

2005（平成17）年3月20日初版1刷発行

底本の親本：「たのしい一年生」講談社

1959（昭和34）年11月～1960（昭和35）年3月

「たのしい二年生」講談社

1960（昭和35）年4月～1960（昭和35）年12月

初出：「たのしい一年生」講談社

1959（昭和34）年11月～1960（昭和35）年3月

「たのしい二年生」講談社

1960（昭和35）年4月～1960（昭和35）年12月

※底本は、連載の回数を見出しとしています。

入力：sogo

校正：北川松生

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かいじん二十めんそう

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>